

主体的に社会の形成に参画する態度を育成する社会科学習指導の工夫 — 現代社会の見方・考え方を働かせる学習活動の充実を通して —

三次市立三和中学校 福田 和宏

研究の要約

本研究は、現代社会の見方・考え方を働かせる学習活動の充実を通して、主体的に社会の形成に参画する態度を育成することを目的とする。文献研究から、主体的に社会の形成に参画する態度の成長は思考力・判断力の成長と密接な関係があり、課題発見、解決の過程で育成されることが分かった。そこで、本研究では、社会に見られる課題について、様々な立場での意見や考えを踏まえた上で「多面的・多角的に考察する力」「根拠を基に解決策を構想（選択・判断）する力」の成長を通して、主体的に社会の形成に参画する態度の成長を見取ることとした。社会との関わりを意識した課題解決的な学習において、生徒は現代社会の見方・考え方を働かせて、多面的・多角的に考察し、様々な立場を踏まえて解決策を構想することができた。したがって、「多面的・多角的に考察する力」「根拠を基に解決策を構想（選択・判断）する力」の成長により、主体的に社会の形成に参画する態度も育成できたと考える。

I 主題設定の理由

特定の課題に関する調査（社会）（平成19年、以下「調査」とする。）では、社会科の学習内容と密接にかかわる実社会・実生活における問題を見いだし、その解決策を考え、提案・説得するといったタイプの学習に力を入れ、実社会・実生活に参加・参画する力の基礎を高めていくことが求められると指摘している。幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（平成28年、以下「中教審答申」とする。）では、社会科の課題として、主体的に社会の形成に参画しようとする態度の育成が不十分であると示されている。「調査」において、これまで主体的に社会の形成に参画する態度の育成が求められてきたにもかかわらず、「中教審答申」においても同様の指摘がされることについて、社会科の教師として大きな責任を感じるとともに、主体的に社会の形成に参画する態度を育成する学習指導は研究する意義があると考える。

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編（平成30年、以下「29年解説」とする。）では、社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資

質・能力の基礎を育成することを目標としている。また、社会的な見方・考え方を働かせることで社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連等を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする学習を一層充実させることを求めている。

これまでの自己の実践や所属校のアンケート結果から、主体的に社会の形成に参画する態度の育成に課題が見られるのは、問題解決的な学習において、追究する課題が、実生活につながるものになっていなかったこと、考察・構想する場面で生徒が様々な立場から課題を深く考察していなかったことが主な原因であると考える。

唐木清志（2018）は、社会参画を目指す社会科授業で社会的な見方・考え方を働かせて課題を考察、構想（選択・判断）する重要性について、現実の社会で起こる複雑で解決困難な課題を多面的・多角的に捉えさせ考察、構想させることで、課題やその解決策が生徒にとって現実的で自分事になると述べている⁽¹⁾。

そこで、本研究では、問題解決的な学習において、実生活につながる社会との関わりを意識した課題を設定する。課題追究の際には、考察、構想する場面の充実を図るために、クロスセッションを用いる。クロスセッションを用いた学習では、市民や行政な

ど立場ごとに班を作らせ、課題を考察させる。次に班を組み替えることで、異なる解決策を主張する生徒が協働して多面的・多角的に課題を構想し、よりよい解決策を選択・判断できるように学習活動を設定する。このように、生徒が課題に関わる概念や理論などと関連付けて現代社会の見方・考え方を働きかせ、課題の解決に向けて考察、構想する学習活動を充実させることにより、主体的に社会の形成に参画する態度を育成できると考え、本研究題目を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 主体的に社会の形成に参画する態度について

(1) 主体的に社会の形成に参画する態度とは

「中教審答申」では、主権者として持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養や、よりよい社会の形成を視野に課題の追究・解決に主体的に取り組む態度の育成がこれまで以上に必要になると示されている。また、社会科において育成を目指す資質・能力について「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱で示し、このうち「学びに向かう力・人間性等」については、「主体的に学習に取り組む態度と、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される自覚や愛情」¹⁾と示されていることから、「態度」は、課題の解決に向けて多面的・多角的に考察すること、考察した結果、深い理解に至ることを通して育っていくと考えられる。

教育課程部会社会・地理歴史・公民ワーキンググループにおける審議の取りまとめ（平成28年、以下「WG審議の取りまとめ」とする。）では、「『主体的に学習に取り組む態度』のうち、学んだことを社会生活に生かそうとする態度や、社会に見られる課題についてよりよい社会を目指して解決しようとする態度等は、よりよい社会の形成に主体的に参画しようとする態度」²⁾として整理されている。また、「29年解説」では、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度について、学習上の課題を意欲的に解決しようとする態度や、よりよい社会の実現に向けて、多面的・多角的に考察、構想（選択・判断）したことを社会生活に生かさうとする態度などを意味していると説明されている。唐木（2008）は、主体的に社会の形成に参画するということは、多様な生き方をしてきた人々がつながり合い、共に新しい社会を創造するために知恵を

絞って汗を流すことと述べている。

以上のことから、主体的に社会の形成に参画する態度とは、社会に見られる課題を発見し、その解決に向け意欲的に追究すること、多様な生き方をしてきた人々の意見や考えを踏まえた上で、多面的・多角的に考察、構想し、構想したことを基にこれまでの自己の生活を振り返ったり、社会生活に生かそうとしたりすることだと考える。

(2) 主体的に社会の形成に参画する態度の育成とは

主体的に社会の形成に参画する態度の育成について、「29年解説」では、「課題の発見、解決のための『思考力・判断力・表現力等』とも相まって、身近な地域社会から地球規模に至るまでの課題の解決の手掛かりを得ること」³⁾を重視している。「思考力・判断力」について「WG審議の取りまとめ」では、社会的な見方・考え方を用いて社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連について、概念等を活用して多面的・多角的に考察すること、社会的な見方・考え方を用いて社会に見られる複雑な課題を把握して、身に付けた判断基準を根拠に解決に向けて構想することを重視している。

以上のことから、主体的に社会の形成に参画する態度の成長は思考力・判断力の成長と密接な関係があること、課題発見、解決の過程で育成されることがわかる。

北俊夫（2012）は、教育の成果は10年後、20年後の将来に表れ、社会づくり、国づくりに参加・参画する人間をいま育てているのだという意識と自覚と責任をもって、いまの子供の教育に当たることが大切であると述べている。主体的に社会の形成に参画する態度の育成には長い期間が必要であり、単元レベルの学習で態度が育成できたのかを見取るのは難しいと考える。

したがって、本研究では、課題解決的な学習において、社会に見られる課題について様々な立場での意見や考えを踏まえた上で「多面的・多角的に考察する力」「根拠を基に解決策を構想（選択・判断）する力」の成長を通して、主体的に社会の形成に参画する態度の成長を見取ることとする。

(3) 主体的に社会の形成に参画する態度の育成と思考力・判断力との関係について

小原友行（2009）は、社会科が求める思考力・判断力とは知る・分かるだけでなく、その背景を熟考し、自分なりの意見や考えをもち、社会への参加・参画を考える力であると述べている。また、永田成

文（2016）は、学習者の行動の変革を促すためには、社会的課題の解決策のみをとらえるのではなく、解決に向けて思考・判断を行う必要があると述べている。原田智仁（2018）は、社会科の思考力・判断力について、思考力とは社会的事象を多面的・多角的に考察する力、判断力とは課題の解決に向けて構想（選択・判断）する力であるとし、主体的な学習態度とはよりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度を意味しており、主体的に社会の形成に参画する態度の育成が期待されているとしている。

以上のことから、学習者の社会への参加・参画を考える力を育成し、行動の変革を促すためには社会的な課題の解決に向けて思考・判断する場面を設定する必要があると考える。また、社会に参加・参画する力の育成には思考力・判断力の育成が必要不可欠なものであることから、社会的事象を多面的・多角的に考察させ、課題の解決に向けて構想（選択・判断）させる学習活動の充実が重要になると考える。

2 現代社会の見方・考え方について

（1）社会的な見方・考え方について

「29年解説」では、社会的な見方・考え方は課題を追究したり解決したりする活動において、社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の視点や方法（考え方）であると説明されている。澤井陽介（2017）は、図1で示すように、各教科の見方・考え方は、深い学びを実現するための思考力や判断力の育成や獲得する知識の構造化に不可欠であること、主体的に学習に取り組む態度や学習を通して涵養される自覚や愛情などにも作用すると述べ、社会科の学習において重要なことを述べている。

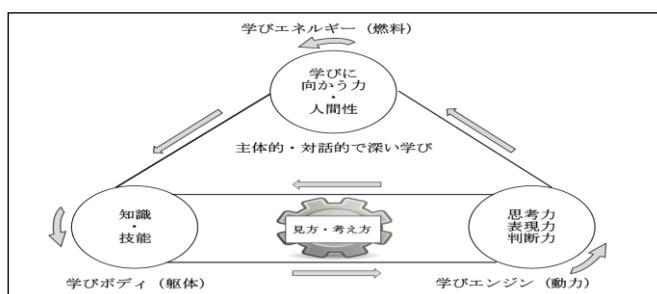


図1 各教科の見方・考え方のイメージ

のことから、社会科の学習において、社会的な見方・考え方を働かせることで、社会や社会的事象

等に関する知識を獲得し、獲得した概念や理論を使って多面的・多角的に考察したり、根拠を基に解決策を構想（選択・判断）したりすることで、社会に見られる課題を意欲的に解決し、よりよい社会の形成に主体的に参画しようとする態度が育成されると考える。

（2）現代社会の見方・考え方と思考力・判断力との関係について

「29年解説」では、社会的な見方・考え方は、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の視点や方法（考え方）であると説明されている。また、社会的な見方・考え方は社会科としての本質的な学びを促し、深い学びを実現するための思考力・判断力の育成に不可欠であるとも説明されている。原田は、思考力とは社会的事象を多面的・多角的に考察する力、判断力とは課題の解決に向けて構想（選択・判断）する力と述べていることから、社会的事象を多面的・多角的に考察する力、課題の解決に向けて構想（選択・判断）する力の育成には社会的な見方・考え方が不可欠であり、視点や方法（考え方）として働くことが重要であると考える。

（3）現代社会の見方・考え方と多面的・多角的な考察について

大杉昭英（2000）は、「経済政策においても『効率』を重視して市場システムのもとでの自由競争を優先する考え方と、『公正』を重視して富の分配の公正さを優先する考え方があり、どちらか一方だけを全て取り入れ判断しているわけではなく、経済の状況に応じながらそれぞれの考え方をどの程度取り入れればよいかを考慮しながら判断がなされている」⁴⁾と述べている。例えば、効率を重視して自由競争を優先する考え方とは、主に経営者の立場から事象を考察することであり、公正を重視して富の分配の公正さを優先する考え方とは、主に労働者の立場から事象を考察することにつながる。これは現代社会の見方・考え方の効率と公正に着目し、経済政策という社会的事象について考察することであり、経営者と労働者という二つの立場に注目することで多角的に事象を捉えて考察したり、構想（選択・判断）したりすることが可能となることを示している。

のことから、現代社会の見方・考え方を働くということは、事象を多角的に捉えて考察することであると考える。

多角的な考察について、橋本康弘（2017）は、「『多角的』とは、『社会的事象を見ている立場』」⁵⁾を

示すとしている。例えば、地方都市に大型店舗が進出するという社会的事象では、住民、商店街、行政などの立場から捉えるということが考えられる。

多面的・多角的に考察することについて、大杉（2000）は、社会的事象は様々な側面をもっていること、社会的事象相互が複雑に関連し合っていることなどの特徴をもっており、それを捉るために生徒自身が様々な角度から見ていくことが必要となると述べ、生徒が多面的・多角的に考察することの必要性について指摘している。

多面的な考察について、「29年解説」では、「学習対象としている社会的事象自体が様々な側面をもつ『多面性』」⁶⁾を踏まえた考察であると説明されている。多面的な考察により、社会的事象が果たしている役割や事象相互の結び付きを捉える考察の重要性が指摘されている。このことから、社会的事象がもつ経済や政治、文化などの側面から考察させ、考察したことを結び付けて捉えることが重要であると考える。例えば地方都市に大型店舗が進出するという社会的事象では、経済面だけで考察しがちである。これまでの自己の実践を振り返ってみても、生徒は地元の経済に与える影響に着目し、経済面で捉えて考察することが多かった。しかし、政治面や文化面からも考察することで、買い物弱者への配慮の必要性や商店街がこれまで果たしてきた役割、商店街の今後の在り方などについて、多面的に考察することが可能となる。

このように、現代社会の見方・考え方を働かせることで、これまで一面的に捉えていた社会的事象を、政治や文化などの側面から多面的に捉えることができるようになると考える。また、様々な立場での考え方や意見の違い、対立する意見や新たに追究する課題に気付くことができるようになると考える。

以上の点を踏まえて考察することで、社会に見られる課題の解決に向けての論点が明確になり、どのような立場で、どのような面を優先すべきかを判断したり、どの立場での、どのような面の考え方や意見をどの程度取り入れるのかなどの考察から、既存の解決策のデメリットに気付き、デメリットを解消した新たな解決策を構想したりすることができるようになると考える。

図2で、地方都市に大型店舗が進出する事象を例に現代社会の見方・考え方を働かせることで、社会的事象を多面的・多角的に捉えて考察するイメージを示す。

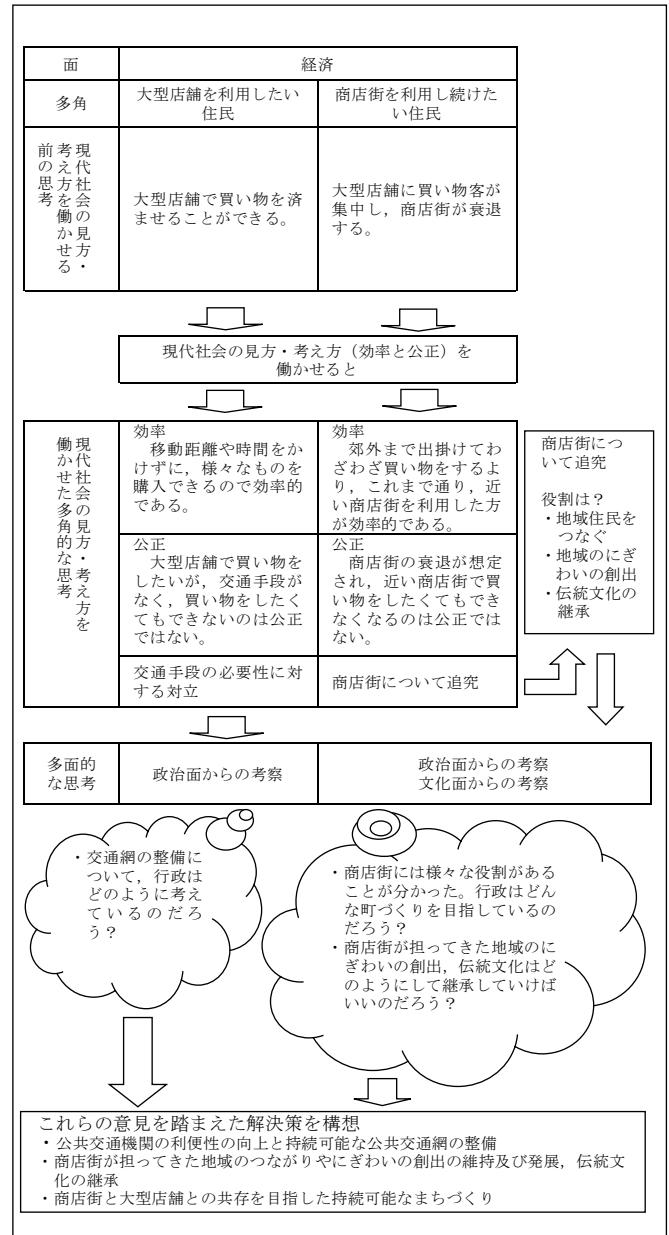


図2 現代社会の見方・考え方を働かせて社会的事象を多面的・多角的に捉えて考察するイメージ

3 現代社会の見方・考え方を働かせる学習活動の充実に向けて

(1) 課題解決的な学習について

吉村功太郎（2016）は、社会問題の民主的な解決を担う公共的資質を育成するための社会科授業は、生徒自身が現在・将来にわたって影響を受ける可能性のある社会問題を取り上げ、社会諸科学の学問的な知識・技能を活用しながら、問題を分析し、多様な意見を互いに出し合い、互いの存在を尊重しながら批判的に議論することによってより良い問題解決を図るような学習活動として編成することが求められると述べている。大杉（2017）は、社会科に

は社会的な見方・考え方を用いた考察や構想、説明、議論等の学習活動が組み込まれた、課題を追究したり解決したりする課題解決的な学習活動が不可欠だと述べ、社会的な見方・考え方を働かせた課題解決的な学習の必要性を指摘している。

以上のことから、主体的に社会の形成に参画する態度を育成するためには、課題解決的な学習において、生徒が影響を受けると考えられる現実の社会問題を取り上げ、既習事項や新たに獲得した知識を活用しながら問題を分析し、社会的な見方・考え方を働かせて多面的・多角的に考察して意見を出し合い、お互いの主張を踏まえた上で解決策を構想（選択・判断）するような学習を設定することが有効であると考える。

（2）社会参画型授業について

唐木（2016）は、社会に参画する態度を育てる授業に関して、子供が市民へと成長する機会を子供に提供する社会科授業の必要性を述べ、問題解決的な学習に基づいて図3のような社会参画型授業を提案している^②。なお、永田（2016）は、社会科では社会参加学習による思考力・判断力の育成が求められていると述べ、小原の提唱する方法原理に基づき、社会的論争問題の解決に向けて思考・判断させることで社会への参加・参画を意識させることは、唐木の提唱する社会参画型授業の学習過程と主旨は同じであると述べている。

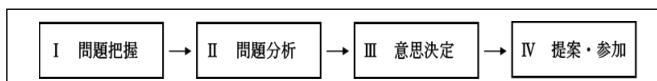


図3 社会参画型授業の学習段階

「I 問題把握」及び「II 問題分析」の段階では、子供は学習問題を把握し、問題の解決に向けて学習の見通しを立てる。この段階で社会的事象に関する構造的な理解が行われ、関連する基礎的・基本的な知識が習得される。

「III意思決定」の段階では、問題を追究し、その解決を図る。唐木（2016）は、「社会に参画する態度を育成する授業の目指すところは、望ましい社会の成立を困難にしている課題を見付け出し、その解決のための方策を考え、望ましい未来社会を構想できる子どもを育成することである」と述べ、社会参画型授業では追究する課題は解決策が対立し、解決する際、子供に葛藤状況をもたらす論争的な課題が教材化されるとしている。このことから、本研究でも考察、構想の場面で、意見が対立する論争的な

課題を取り上げることとする。

「IV提案・参加」の段階では、解決策をまとめ、社会に向けて発信する。小原（2009）は、思考力・判断力を育成するための学習活動の一つとして、「IV提案・参加」の段階での「自分の考えを論述する」学習活動を挙げている。この学習活動は、社会的事象の中の問題や課題に対して、「どうしたらよいか、どの解決策が望ましいか」と問い合わせ、自分なりの意見や考えをもつ活動であると述べている。

（3）社会参画型授業の学習段階と現代社会の見方・考え方を働かせる学習について

社会参画型授業の「III意思決定」の段階では、生徒が現代社会の見方・考え方を働かせ、多面的・多角的に課題を考察しそれぞれ解決策を構想する。しかし、それぞれの立場や価値観の違いから解決策を一つに絞り込むことは難しく、生徒は自分とは異なる解決策に触れることで葛藤に直面する。そこで現代社会の見方・考え方を働かせて構想（選択・判断）した解決策を検証し、実現可能なものなのか、その解決策を実行した場合に生じる課題にはどのようなものがあるかなどを明らかにする。

次の「IV提案・参加」の段階では、葛藤を乗り越えて根拠を基に新たな解決策をまとめる。ここでまとめる解決策は実現可能なものであり、選択・判断したことで生じるデメリットをどのように解消しようとしているかが重要である。「中教審答申」では学びに向かう力・人間性等の育成について「社会や世界との関わりの中で、学んだことの意義を実感できるような学習活動を充実させていくこと」^③が示されており、「III意思決定」の段階で考えた解決策を、現代社会の見方・考え方を働かせてさらに問い合わせ直すことで、子供は社会に見られる課題を自分事として捉えられるようになると考える。

（4）クロスセッションについて

社会的事象を多面的・多角的に考察したり、課題の解決に向けて構想（選択・判断）したりするためには、複数の視点や立場が必要となる。そこで、本研究ではクロスセッションを用いる。クロスセッションとは、4～5人のグループを作り、生徒一人一人が学習（作業）課題を分担し、その後、グループを組み替えることにより、異なる視点や方法、内容で追究してきた成果に基づいて交流を行い、課題を解決していく活動である。この活動の良さは、課題の解決に向けて複数の視点や立場を取り入れることができることである。同じ立場や視点のグループ内での話し合いに終始すると学びを深めることは難

しいと考える。よって、本研究ではクロスセッションを用いることで多面的・多角的に考察させ、学びを深めさせたい。

以上のことと踏まえ、単元全体の構想を図4に示す。

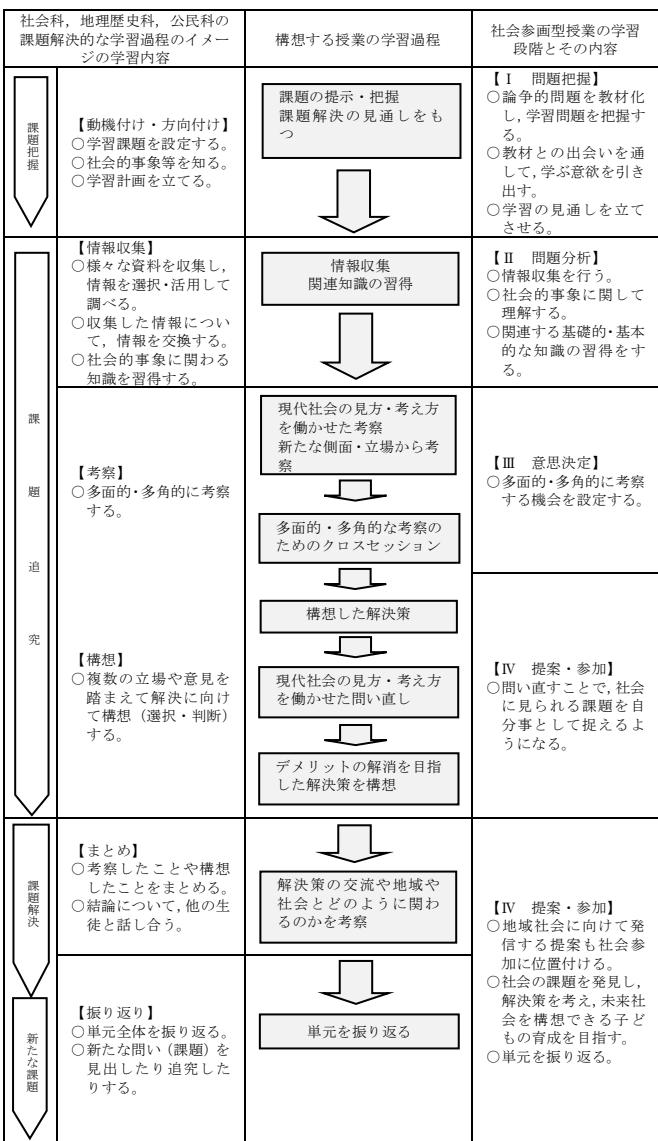


図4 単元全体の構想

III 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

課題解決的な学習において、「考察」「構想」の場面で現代社会の見方・考え方を働かせる学習活動を充実させれば、「多面的・多角的に考察する力」「根拠を基に解決策を構想（選択・判断）する力」が育ち、主体的に社会の形成に参画する態度が育成されるだろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表1に示す。

表1 検証の視点と方法

	検証の視点	方法
1	クロスセッションは他者の視点を取り入れ、多面的・多角的に考察するために有効であったか。	ワークシートの記述内容
2	解決策を構想（選択・判断）することができたか。	ワークシートアンケート
3	社会に見られる課題について、現代社会の見方・考え方を働かせて多面的・多角的に考察することができたか。	プレテストポストテスト

(1) クロスセッションの有効性について

多様な価値観や利害関係が複雑に絡み合った現代の社会では、様々な立場や価値観の違いから対立が生まれることが多い。社会の問題を把握し、よりよい解決策を構想（選択・判断）するためには、自己の視点からだけではなく、他者の視点から社会の問題を把握し、他者との関わりを通してお互いが妥協点を見いだし合意することが重要である。他者の視点に気付いたり、他者の視点から多面的・多角的に考察したりしているかを通してクロスセッションの有効性について検証した。

(2) 解決策を構想（選択・判断）することができたかについて

前期では、75歳以上の高齢者は自動車の運転を禁止するか、禁止しないかという学習課題について、様々な立場からの考え方や意見を踏まえ、解決策を構想（選択・判断）することができたかについて検証した。

後期では、みよし鶴飼伝承館の建設に賛成するか、反対するかという学習課題について、多面的・多角的に考察し、解決策を構想（選択・判断）することができたかについて検証した。

(3) プレテスト及びポストテストについて

研究授業に伴い、先に示した現代社会の見方・考え方に関するプレテスト、ポストテストを実施した。

前期プレテスト、ポストテストでは現代社会の見方・考え方（効率と公正）を働かせて多面的・多角的に考察することで、ビジャーパフォーマンス席を開設するか否かを判断するという課題を設定した。

後期プレテスト、ポストテストでは現代社会の見方・考え方（効率・公正及び持続可能性）を働かせて多面的・多角的に考察することで、条例を制定するか否かを判断するという課題を設定した。

次のページの図5で前期プレテスト・ポストテストを、図6で後期プレテスト・ポストテストを示す。

プロ野球において、ここ数年、全国区の超人気球団となったM球団の試合観戦チケットが入手困難となり、試合を観戦したい一部のファンからは苦情が出るようになりました。また、ネット上ではM球団の試合観戦チケットが高値で売買されるなど社会問題化してきました。そこでM球団は同じソ・リーグに所属する5球団のうち、伝統的に人気がありビジターパフォーマンス席が満席となる可能性が高いA球団とB球団以外のC球団とD球団、E球団の3チームとの試合に限って三和スタジアムのビジターパフォーマンス席の一部（400席）をM球団のファンに開放することとしました。

※ビジターパフォーマンス席

M球団が「ビジターチーム（M球団と対戦するチーム）」が気兼ねなく応援できるようにと用意した席で三塁側エリアの1700席ほどがこのビジターパフォーマンス席にあります。基本的にはビジターチームのファンが試合を楽しむための席として用意されたものです。

（1）あなたはビジターパフォーマンス席を開放すべきだと思いますか。

開放する 開放しない

理由 _____

（2）ビジターパフォーマンス席を開放するかどうかについて、あなたが確認したい情報とその理由があれば書いてください。

確認したい情報とその理由 _____

図5 前期プレテスト、ポストテスト

M町のある島は、東洋のガラパゴス島と呼ばれ、島の北部には他の地域では見られない独特な自然が広がり、さらに島固有の動物も生息しています。また、島のほぼ中央には三和岳（1,963m）を主峰とする標高1,800mを超える峰々がそびえています。豊かな自然を愛する人々や、登山を目的とした人が訪れる秘境として人気があります。この島の産業は温暖な気候を生かしたポンカンや米、お茶などの生産が中心です。10年ほど前に、この島が世界遺産に登録されたことから、知名度が増し、連日多くの観光客が押し寄せるようになりました。多い時には年間9万人、1日に1,000人以上が集中するようになりました。観光客の増加により、観光関連産業が飛躍的に発展するなど地域経済に大きな影響を与えました。サービス業の生産額をみると2008年に219億円でしたが、2018年には244億円まで拡大し、町民の約70%がサービス業に従事するようになりました。しかし、観光客が急激に増加したため、登山道の劣化やゴミの不法投棄、山菜などの採取や野生動物に許可なく餌を与えるなどの問題が起こるようになりました。

これらの問題を受けて、M町の町長は、島の北部の独特的な自然、島固有の小動物や生態系を保護するため、事前に町長の承認を受けた人だけ立ち入りを認める（1日400人限定で手数料500円が必要）条例案を町議会に提出する予定です。

（1）あなたはこの条例案に賛成ですか、反対ですか。

賛成する 反対する

理由 _____

（2）説明文に関して、あなたが確認したい情報とその理由があれば書いてください。

確認したい情報とその理由 _____

図6 後期プレテスト、ポストテスト

（4）現代社会の見方・考え方の分析について

前期では75歳以上の高齢者は自動車の運転を禁止するか、禁止しないかという学習課題について、また、後期ではみよし鶴飼伝承館の建設に賛成するか、反対するかという学習課題について、現代社会の見方・考え方を働かせることによって、生徒の思考にどのような変容があったかについて検証した。

（5）アンケートについて

研究授業開始前と終了後にアンケートを行った。4段階の評定尺度法を用いて、生徒が社会科の学習を通して主体的に社会の形成に参画しようとしているかという点とクロスセッションの有効性、生徒の意識の変化について把握した。

IV 前期研究授業について

1 前期研究授業の内容

- 期間 平成30年7月6日～平成30年7月13日
- 対象 所属校第3学年（1学級18名）

○ 単元名 現代社会の見方や考え方

○ 目標

対立と合意、効率と公正などの現代社会を捉えさせる見方・考え方を働かせ、身近な地域の課題に対する解決策を構想し、「多面的・多角的に考察する力」「根拠を基に解決策を構想（選択・判断）する力」を身に付けさせることで、主体的に社会の形成に参画する態度の育成を図る。

2 前期研究授業の指導計画（全6時間）

時	学習内容
1	課題把握【動機付け・方向付け】 75歳以上の高齢者は自動車の運転を禁止するか、禁止しないかという学習課題を設定し、どのような立場で、どのような資料を収集するかなどの課題解決の見通しをもつ。
2	課題追究【情報収集】【クロスセッション】 様々な立場からの資料を収集し、同じ立場で情報を収集した生徒と情報を交換する。
3	課題追究【情報収集】 様々な立場で収集した情報について、異なる立場から情報を収集した生徒と情報を交換し、解決策を構想する。
4	課題追究【情報収集】 部活動で利用するグラウンドの分割問題から、対立と合意、効率や公正などの現代社会の見方・考え方の働きかせ方に理解する。
5	課題追究【考察・構想】 現代社会の見方・考え方を働かせて、各グループの解決策を検証し、自分なりの解決策を構想する。
6	課題解決【まとめ】・新たな課題【振り返り】 単元全体を振り返り、学習したことなどをまとめる。

V 前期研究授業の分析と考察

1 クロスセッションの分析

他者の視点を取り入れるためにクロスセッションを行った。班員に「高齢者」「高齢者の家族」「被害者とその家族」「警察・市（行政）」の立場を分担させ、それぞれ情報収集を行った。情報収集したあと情報交換を行い、高齢者の運転を禁止するか、禁止しないか判断した。判断が変わった生徒a・bの記述の変容を表2に示す。

表2 クロスセッション前後の生徒の判断とその理由

	生徒a	生徒b
クロスセッション前	禁止する。 自動車の運転をして、自分1人で事故をするのではなく、他人を巻き込んだり、迷惑をかけたりしてしまうから。	禁止しない。 事故が起こることは大変なことだけ、自分の親が働いていて送り迎えをしてくれるのは祖父母だから車の運転は禁止しなくていいと思う。
クロスセッション後	禁止しない。 高齢者の家族はもちろん心配をしているし、被害者の人たちも、高齢者に運転してほしくないと願っているのもわかる。しかし、高齢者全員を運転禁止にすると、高齢者の生活が不便になる。警察などが免許更新のときに認知症の検査などを実施しているので検査の結果、「危ない」と判断された人だけにする。	禁止する。 運転に自信がある人や、ブレーキやアクセルの踏み間違いをしないだろうと思っている人がいるけどそれが事故につながっていると思うし、高齢者が事故を起こす確率も高くなり、たくさんの人に迷惑がかかるから。自分のせいで祖父母に悲しい思いをしてほしくない。それに警察や市が様々な取組を行っているので禁止してもよい。

生徒aは、クロスセッション前は「被害者とその

「家族」の視点で判断をしている。しかし、クロスセッション後には「高齢者」「高齢者の家族」「被害者とその家族」「警察」の複数の視点から判断している。生徒bは、クロスセッション前は「高齢者」の視点と自己の日頃の生活から利便性に重点をおいて判断している。しかし、クロスセッション後は高齢者の事故が増加している要因と事故がもたらす影響などから考察し、そこに警察や行政の取組を付け加えて判断をしている。生徒a・bともに様々な立場での意見や考え方を知り、多面的・多角的に考察するように変容している。

また、クロスセッション前後で判断が変化しなかった生徒13名（76.5%）の記述を分析すると、10名（77%）の生徒が「高齢者の不安な気もちは分かるが、市の支援事業もあるし警察の方もいろいろ考えている。」「高齢者や被害者の家族は運転をやめてほしいと願っているし、市の事業も満足度が高い。」などの複数の視点を踏まえて考察するようになっている。

以上のことから、多面的・多角的に考察するためクロスセッションは有効であったと考える。一方で、3名（23%）の生徒の記述は、「事故が起こる確率が高いから。」など単純に理由を示すにとどまり、複数の立場を踏まえた考察となっていない。

2 解決策を構想（選択・判断）することができたか

多面的・多角的に考察した解決策を現代社会の見方・考え方を働かせて検証し、その解決策を実行した場合に生じる課題を検討し、改善策を構想した。解決策の課題を踏まえ、改善策を構想することができた生徒cの記述の変容を表3に示す。

表3 生徒cの記述の変容

	生徒c
解決策	禁止する。 自分の行きたい所には行けなくなるけど、事故を減らすためには禁止した方がいいから。
課題	・病院や買い物などに行くときにはどうやっていくのか。 ・高齢者の不満はどうするのか。
改善策	禁止する。 週2回位、地域ごとに無料でバスを出し、免許を返納した高齢者の家をまわってもらう。緊急の場合は近所の人に頼れるようにしておく。高齢者は不満かもしれないけど、合意するためにはお互い我慢もしないといけない。

生徒cは、解決策では、高齢者の交通事故を防ぐために運転を禁止している。しかし、その解決策の課題として他の班員から高齢者の移動が制限されていることが挙げられた。そこで改善策では、市の支

援として無料のバスを手配し、高齢者の移動の支援を提案している。さらに生徒cは、「高齢者」や「被害者とその家族」などのそれぞれの立場により、合意することの難しさに気付き、お互いが配慮し合うことにも触れている。

3 効率と公正の学習前後の生徒の変容

クロスセッション後に、効率と公正について学習をしたあと、高齢者の運転について禁止するか、禁止しないかを再度判断した。その結果を表4で示す。

表4 効率と公正の学習前後の生徒の判断の変化

		現代社会の見方・考え方の学習後		計(名)
		禁止する	禁止しない	
現代社会の見方・考え方の学習前	禁止する	2	1 1	1 3
	禁止しない	1	3	4
計(名)		3	1 4	1 7

表4から、効率と公正の学習前では、高齢者の運転を禁止すると判断した生徒は13名（76.5%）で、禁止しないと判断した生徒は4名（23.5%）であった。効率と公正の学習後に再度判断させると、高齢者の運転を禁止すると判断した生徒は3名（17.6%）で、禁止しないと判断した生徒は14名（82.4%）であり、大きく変化している。学習前に高齢者の自動車の運転を禁止すると判断した生徒のうち、禁止しないに判断が変わった生徒dの思考の変容を表5に示す。

表5 生徒dの思考の変容

効率と公正の学習前
禁止する。 高齢者の方に悪気がなくとも、人の命を奪うことはいけないことだから。
効率と公正の学習後
禁止しない。 免許取り消しの条件をきびしくすればいいから。若者の方が高齢者よりも交通事故率が高いので、公正とは言えない。 意見が変わった理由 75歳以上の人でも安全に運転できる人はいるし、年齢を問わず、若くても危険な運転をする人は免許を取り消せばいいと思ったから。

生徒dは、学習前は高齢者による事故の発生率と被害に着目して、主に「被害者とその家族」の立場から考察し判断していた。学習後は、公正の視点を働かせて他の年代の事故率にも着目して交通事故を捉えるようになった。そして、高齢者だから一律に禁止するのではなく、危険な運転に対して個別に対処する方がよいという意見に変わった。このことか

ら、公正の視点を働きかせることで、より多角的に考察し判断していると考えられる。

4 プレテストとポストテストの分析

プレテストとポストテストにおいて、効率と公正を働きかせ、様々な立場から多面的・多角的に考察できたかについて、表6のような検証の判断基準を設定した。また、プレテストとポストテストにおける効率と公正の視点例を表7のように整理し、結果を表8に示す。

表6 効率と公正を働きかせて多面的・多角的に考察できたかを検証する判断基準

段階	判断基準
A	効率と公正の両方の視点から考察し、根拠を挙げながら判断している。
B	効率または公正のどちらかの視点のみで考察し、根拠を挙げながら判断している。
C	効率と公正の視点から考察することができない。

表7 プレテストとポストテストにおける効率と公正の視点

各視点で捉える内容例	
効率	◎効率的である（無駄を省く） ・空席となるビジャーパフォーマンス席をM球団のファンに開放することで、空席を減らしM球団は効率よく収入を増やすことができる。 ・M球団のファンが観戦できるようになればチケットが高値で売買される問題が解消（緩和）され、M球団が他の業務に専念することができる。
公正	◎公正ではない ・ビジャーパフォーマンス席が満席となる可能性が高いA、B球団以外のC、D、E球団の3チームに限ってビジャーパフォーマンス席の一部を開放しており、ビジャーチームが公正に扱われていない。 ・M球団のファンのみ優遇されており、公正とは言えない。

表8 プレテスト及びポストテストの結果

		ポストテスト			計（名）
		A	B	C	
プレテスト	A	2	0	0	2
	B	2	6	0	8
	C	0	4	3	7
計（名）		4	10	3	17

表8のようにプレテストでは、効率と公正の両方の視点から考察し、根拠を示して判断した生徒は2名（11.8%）だったが、ポストテストでは効率と公正の両方の視点から考察した生徒は4名（23.5%）になった。また、効率と公正のいずれの視点からも考察できない生徒7名（41.2%）のうち、ポストテストでは4名（23.5%）が、効率あるいは公正の視点で考察することができた。次にプレテストでは視点が一つだったが、ポストテストでは視点が二つに増えた生徒e・fの記述の変容を表9に示す。

表9 生徒e・fの記述の変容

	生徒e	生徒f
プレテスト	開放する。 ビジャーパフォーマンス席が空いているのなら、観客席が空いているのに試合を観戦することができないM球団のファンの人達と席を分け合い観戦するといい。	開放しない。 ビジャーチームのファンが試合を楽しむ席だから。ビジャーパフォーマンス席が満員ではない確率が低かったとしても、そこにM球団のファンの人達が入ると、ビジャーチームのファンが応援できないし、トラブルなどが起こるかもしれないから。
ポストテスト	開放する。 ビジャーパフォーマンス席が空いていて、ビジャーチームがM球団のファンの人達のことを気にすることなく応援でき、ビジャーチームのファンの許可があれば空いているビジャーパフォーマンス席を使ってもいいと思った。	開放する。 大事なのは限られた応援席をM球団やビジャーチームを含めたみんなで使うべきだと思う。1700席のビジャーパフォーマンス席から空席となつた400席を使うだけだからいいと思うけど、ビジャーワークでの応援は遠慮した方がよい。

効率の視点

公正の視点

生徒eは、プレテスト及びポストテストでビジャーパフォーマンス席を開放するという結論は変わらない。しかし、プレテストでは効率の視点のみで考察し判断をしているが、ポストテストでは効率と公正の視点で考察して判断し、記述にビジャーチームへの配慮が加わっている。生徒fは、プレ、ポストテストでは結論が変わっている。プレテストでは公正の視点のみで考察し判断しているが、ポストテストでは効率と公正の視点で考察して判断し、席は開放するが、ビジャーチームへの配慮を強調している。生徒e・fともに、それぞれの立場や考え方の違いを理解した上で、現代社会の見方・考え方を働きかせて多面的・多角的に考察した結果だと考える。

一方で、ポストテストでも効率または公正のいずれの視点からも考察できていない生徒が3名（17.6%）だった。これは、効率と公正の視点そのものが理解できていないため、学習に転用できなかつたと考えられる。効率と公正の視点をイメージしやすい身近な事例で指導することが必要である。

5 事前・事後のアンケートの分析

事前・事後アンケートの結果を図7に示す。

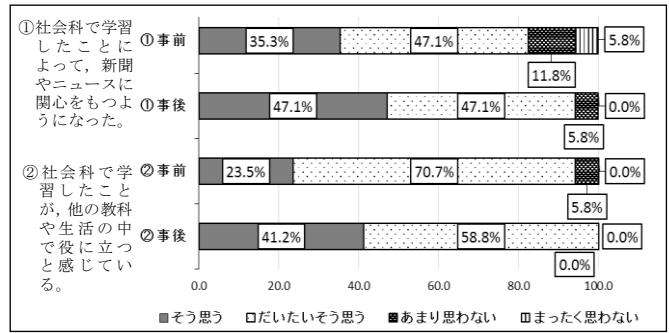


図7 事前・事後のアンケート結果

事前と事後を比較すると、図7中の①「社会科で学習したことによって、新聞やニュースに関心をもつようになった。」について、肯定的な意見が82.4%から94.2%に伸びた。また、②の「社会科で学習したことが、他の教科や生活の中で役に立つと感じている。」については、肯定的な意見が94.2%から100%に伸びた。社会に見られる課題の解決に向けた学習活動を通して、社会科の学習が実際の生活に役立つと肯定的に捉える生徒の割合が増えている。

VI 前期研究のまとめ

1 前期研究の成果

課題解決的な学習において、社会との関わりを意識した学習活動は、現代社会の見方・考え方を働かせることで、「多面的・多角的に課題を考察する力」「根拠を基に解決策を構想（選択・判断）する力」の成長に有効であることが分かった。また、クロスセッションは、他者の視点を踏まえて多面的・多角的に考察する上で有効であることが分かった。

2 前期研究の課題

現代社会の見方・考え方について、対立と合意、効率と公正を取り上げたが、今後は他の視点も用いた単元を開発する必要がある。主体的に社会の形成に参画する態度を育成するために、「多面的・多角的に課題を考察する力」「根拠を基に解決策を構想（選択・判断）する力」の成長に継続して取り組む必要がある。また、クロスセッションは他者の視点を取り入れるという面では一定の成果があったと考えるが、収集した情報を伝えきれない生徒もいたので、ワークシートの工夫を図るなどの改善が必要である。

VII 後期研究授業について

前期研究授業では、どのような立場で考察すればよいかについて指導者が提示した。後期研究授業では、前期で習得した対立と合意、効率と公正といった現代社会の見方・考え方を働かせて学習者が自らさまざまな立場に気付くとともに、政治や文化などの側面から事象を捉え、多面的・多角的に考察することを目指した。さらに、現代社会の見方・考え方の一つである「持続可能性」の視点から、社会的事象を捉え直し、解決策を構想することを目指した。なお、「持続可能性」について、「29年解説」

では、将来の世代のニーズを満たすようにしながら、現在の世代のニーズを満たすような社会の形成を意味していると説明されている。また、持続可能な社会を形成するためには、世代間の公平、環境の保全、経済の開発などを調和の下に進めていくことが必要であると説明されている。

1 後期研究授業の内容

- 期 間 平成30年12月10日～平成30年12月18日
- 対 象 所属校第3学年（1学級18名）
- 単元名 地方自治と私たち
- 目 標

前期で習得した対立と合意、効率と公正に加えて本単元で習得する持続可能性といった現代社会の見方・考え方を働かせ、地域の課題に対する解決策を構想し、「多面的・多角的に考察する力」「根拠を基に解決策を構想（選択・判断）する力」を身に付けさせることで、主体的に社会の形成に参画する態度の育成を図る。

2 後期研究授業の指導計画（全8時間）

時	学習 内 容
1	課題把握【動機付け・方向付け】 地方自治のしくみや理念について理解し、今後の学習の方向性を把握する。
2	課題把握【動機付け・方向付け】 地方財政の課題と今後の財政の在り方について理解し、三次市の財政上の課題と三次市の行政の方向性を理解する。
3	課題把握【動機付け・方向付け】 みよし鵜飼伝承館の建設に賛成か反対かという学習課題を設定し、どのような立場で、どのような資料を収集するかなどの課題解決の見通しをもつ。
4	課題追究【情報収集】【クロスセッション】 様々な立場からの資料を収集し、同じ立場で情報を収集した生徒と情報を交換する。
5	課題追究【情報収集】 様々な立場で収集した情報について、異なる立場から情報を収集した生徒と情報を交換し、解決策を構想する。
6	課題追究【情報収集】 みよし運動公園と広島広域公園建設の共通点から、それらが当時の人々や現代の人々にも必要だったことに気付かせ、現代社会の見方・考え方の一つである持続可能性について理解する。
7	課題追究【考察・構想】 現代社会の見方・考え方を働かせて、各グループの解決策を検証し、自分なりの解決策を構想する。
8	課題解決【まとめ】・新たな課題【振り返り】 単元全体を振り返り、学習したことなどをまとめる。

VIII 後期研究授業の分析と考察

1 クロスセッションの分析

クロスセッションを行うためには、様々な立場からの考察が必要となる。そこで、現代社会の見方・考え方を働かせて、どのような立場から情報収集を行えばよいのかを考察した。まず、鵜飼伝承館の建設に賛成か反対かについて、効率・公正の視点から考察して判断をした。その判断した理由から対立している意見などをまとめ、生徒は、「行政」「A地区（鵜飼伝承館の建設に反対）」「B地区（鵜飼伝

承館の建設に賛成）」の三つの立場からの考察の必要性に気付き、それぞれの立場から情報収集を行った。前期の課題として、収集した情報を他の生徒に伝えることができないという課題が挙げられた。そこで、ワークシートの改善として、収集した情報の共通点を記入する欄を設けた。例えば、「B地区」について情報収集を行った場合、いわゆる「ハコモノ行政」の成功例を中心に情報収集を行った。その後、「ハコモノ行政」の成功例の共通点や理由を考えさせ、それをワークシートに記入させた。それぞれの事例について、要点をまとめた伝達が可能となり、必要な情報を伝えることができた。

情報収集したあと情報交換を行い、みよし鵜飼伝承館の建設に賛成か、反対かを判断させた。判断が変わった生徒は6名（35.3%）であった。判断が変化した生徒g・hの記述の変容を表10に示す。

表10 クロスセッション前後の生徒の判断とその理由

	生徒g	生徒h
クロスセッション前	賛成する。 三次の鵜飼文化をたくさんの人々に知ってもらいたい、三次をPRすることができるから。	反対する。 子育て世帯などの定住を目指した方が三次市の人口そのものが増えるからです。住みやすい所になると、確実に人は増えると思います。
クロスセッション後	反対する。 もし、成功しなかったときに残った借金は市民の税金で負担されることになるので、もう一度建設する目的やメリットを確認したほうがいい。	賛成する。 三次市の魅力を生かしているから。三次市全体で取り組めば、成功するはずだし、リピーターも増やせると思うから。

生徒gは、クロスセッション前は「B地区」の視点から考察し、鵜飼伝承館をきっかけとして観光客の増加を目指している。しかし、クロスセッション後は「A地区」の立場から「ハコモノ行政」の失敗の可能性を視野に入れ、鵜飼伝承館を建設することによる財政上のリスクに気付き、建設に慎重な姿勢を見せている。一方で生徒hは、クロスセッション前は「A地区」の立場から考察し、子育て支援の拡充を図り、子育て世帯が定住することが三次市の活性化につながると判断している。しかし、クロスセッション後は、「B地区」の立場から地域全体が活性化に成功した事例を理解し、三次市の現状や「行政」がどのようなまちづくりを目指しているのかを加味して考察し、判断をしている。

また、クロスセッション前後で判断が変化しなかった生徒11名（64.7%）の記述を分析すると、三次の伝統の鵜飼を知ってもらいたい」「人が来なかつたらお金のムダ」などの単純な理由から、「鵜飼伝

承館の競合施設は少ないと思うし、地元の魅力を生かせるから。また、観光施設が多いと回遊性が高まり三次市全体の活性化につながるから。」「観光スポットをつくることには賛成だが、リピーターを期待できるほどの魅力を感じなかったから。」など、三次市の魅力を生かした観光業に重点を置きたい「行政」の立場に理解を示しつつ、「A地区」や「B地区」の立場を踏まえて考察するようになっている。以上のことから、多角的に考察するためにクロスセッションは有効であったと考える。

2 解決策を構想（選択・判断）することができたか

多面的・多角的に考察した解決策を現代社会の見方・考え方を働かせて検証し、その解決策を実行した場合に生じる課題を検討し、改善策を構想した。現代社会の見方・考え方を働かせて考察する際の面と角との関係を表11に示し、解決策の課題を踏まえ、改善策を構想することができた生徒iの記述の変容を表12に示す。

表11 現代社会の見方・考え方を働かせて獲得する多角・多面

学習過程	現代社会の見方・考え方	多角	多面
結論	効率	A地区 行政	経済 政治
改善策	効率 持続可能性	A地区 行政 B地区	経済 政治 文化

表12 生徒iの記述の変容

結論	反対する。 みよし鵜飼伝承館を建設して万が一失敗したときには市民の税金で負担しなければならなくなる。財政の無駄がなくなる。
課題	鵜飼という三次市の伝統芸能が受け継がれなくなる。
改善策	反対する。 伝統芸能を残すことは必要だと思うけど、財政が困難な三次市が、今知名度の低い鵜飼伝承館を建てるべきでない。夏には鵜飼の体験ができるので、わざわざ伝承館を建てなくても工夫して鵜飼の継承はできると思う。美術館や駅とコラボして鵜飼の特設コーナーを作り、写真や動画を流して三次市全体で鵜飼の知名度を上げる。

生徒iは、最初は効率の視点から三次市の経済面にのみ着目して判断をしていた。しかし、その結論の課題として、他の班の班員から、持続可能性の視点からの考察として「B地区」が期待する伝統芸能の鵜飼が伝承されなくなることが挙げられた。そこで改善策では、「行政」の立場から三次市の財政状況を考慮し、更に持続可能性の視点から考察して、新たな施設を建設しなくとも、既存の施設などとコ

ラボレーションすることで「B地区」が期待する伝統芸能の継承に努めようとしている。生徒iは、経済面と文化面での持続可能性という視点から考察をし、三次市の財政と伝統芸能の継承のどちらも重要だと捉え、両立を目指している。なお、生徒iはこれらの政策により鵜飼の知名度が向上すれば、持続可能性の視点から将来的には鵜飼伝承館の建設に賛成であるとグループの話し合いで述べており、現代社会の見方・考え方を獲得することで、より多面的・多角的に考察することができた。現代社会の見方・考え方を働かせて多面的・多角的に考察し、解決策を構想することができたかを検証する判断基準を、表13に示す。

表13 現代社会の見方・考え方を働かせて多面的・多角的に考察し、解決策を構想することができたかを検証する判断基準

段階		判断基準		
A		効率・公正及び持続可能性の視点から考察し、三つの側面と三つの立場から考察して、根拠を挙げながら解決策を構想している。		
B		効率・公正または持続可能性どちらかの視点で考察し、二つの側面と二つの立場から考察して、根拠を挙げながら解決策を構想している。		
C		効率・公正、持続可能性の視点から考察することはできていないが、解決策を示している。		
D		効率・公正、持続可能性の視点から考察することができず、解決策も示していない。		

段階Aの生徒は約65%，段階Bの生徒は30%，段階Cの生徒は5%，段階Dの生徒はいなかった。90%以上の生徒が現代社会の見方・考え方を働かせて考察した結果、多面的・多角的に考察し、お互いの立場を考慮した解決策を構想することができた。

3 持続可能性の学習前後の生徒の変容

クロスセッション後、現代社会の見方・考え方の一つである持続可能性について学習した。その後、みよし鵜飼伝承館の建設について賛成か、反対かを再度判断した。その結果を表14で示す。

表14 持続可能性の学習前と学習後の生徒の判断の変化

		現代社会の見方・考え方の学習後		
		賛成	反対	計(名)
現代社会の見方・考え方の学習前	賛成	5	8	13
	反対	1	3	4
計(名)		6	11	17

表14から、持続可能性の学習前では、みよし鵜飼伝承館の建設に賛成と判断した生徒は13名(76.5%)で、反対と判断した生徒は4名(23.5%)であった。持続可能性の学習後に再度判断させると、みよし鵜

飼伝承館の建設に賛成と判断した生徒は6名(35.3%)で、反対と判断した生徒は11名(64.7%)であった。学習前にみよし鵜飼伝承館の建設に賛成と判断した生徒のうち、反対に判断が変化した生徒jの思考の変容を表15に示す。

表15 生徒jの思考の変容

持続可能性の学習前	
賛成する。 全國的に見てもこのような施設は少ないので、見てみる価値はあると思うので、建設してもよいと思う。	
持続可能性の学習後	
反対する。 鵜飼は全國的に珍しいし、後世に引き継いでいく伝統文化だと思う。そのため鵜飼伝承館を建設して三次の財政が苦しくなったり、次の世代に迷惑をかけるようになるんだったら、つまらない方がいいと思う。財政が破綻すると自分たちの生活もしないくなるし、そもそも鵜飼も守れなくなる。	

生徒jは、鵜飼に関連する施設が全國的に少ないという経済面から考察して建設に賛成している。しかし、持続可能性の学習後は、経済面と文化面から考察して最終的な判断も変化している。まず、経済面では現在の状況からのみ捉えて判断をしていたが、持続可能性の学習後は、現在の世代の負担に加え、次の世代の負担の可能性にまで考慮して考察するようになっている。更に鵜飼の伝統的価値を再認識し、後世に引き継いでいく重要さに気付き、文化面からも考察するようになっている。文化面からの考察により伝統文化の継承の必要性を認識しつつも、経済面からの考察によって、将来的に市の財政が破綻した場合には現在や次の世代の生活も守れなくなり、伝統文化そのものも守れなくなるという経済面・文化面からの長期的な考察を通して最終的な判断も変化している。

4 プレテスト及びポストテストについて

プレテストとポストテストにおいて、現代社会の見方・考え方(効率・公正及び持続可能性)を働かせ、様々な立場から多面的・多角的に考察できたかについて、表16のような検証の判断基準を設定した。また、プレテストとポストテストにおける現代社会の見方・考え方の視点と内容例を表17のように整理し、結果を表18に示す。

表16 現代社会の見方・考え方を働かせて多面的・多角的に考察できたかを検証する判断基準

段階		判断基準
A		効率・公正及び持続可能性の視点から考察し、根拠を挙げながら判断している。
B		効率・公正または持続可能性どちらかの視点で考察し、根拠を挙げながら判断している。
C		効率・公正、持続可能性の視点から考察することができない。

表17 プレテストとポストテストにおける現代社会の見方・考え方の視点と内容例

現代社会の見方・考え方の内容例	
効率	・観光客が増加していることから、町民の約70%が従事するサービス業に重点を置けば、雇用の安定につながり、収入も増えて効率よく町を発展させることができる。
公正	・条例が制定されると、多くの観光客のうち承認を受けた観光客しか島に立ち入ることができず、公正ではない。
持続可能性	・観光客を制限すると、町民の約70%が従事するサービス業が成り立たなくなり、町の経済に大きな影響を与える、将来的に町が成り立たなくなる。 ・観光客を制限せずに、独特な自然や島固有の小動物などを失ってしまうと、観光関連産業も成り立たなくなり、町の経済に大きな影響を与えることになる。 ・観光客を制限することで、北部の独特な自然、島固有の小動物や生態系を守り、次の世代に豊かな自然を残すことができる。

表18 プレテスト及びポストテストの結果

		ポストテスト			計(名)
		A	B	C	
プレテスト	A	0	0	0	0
	B	8	7	0	15
	C	0	2	0	2
計(名)		8	9	0	17

プレテストでは、効率・公正及び持続可能性の視点から考察し、根拠を示して判断した生徒はいなかった。しかし、ポストテストでは効率・公正及び持続可能性の視点から考察した生徒は8名(47.1%)になった。プレテストでは効率・公正の視点から考察し判断をしていたが、ポストテストでは持続可能性の視点も加え、長期的なまちづくりに関する記述や環境の保全に関する記述が見られた。また、プレテストでは効率・公正、持続可能性のいずれの視点からも考察できない生徒は2名(11.8%)であったが、ポストテストでは効率・公正または持続可能性の視点で考察することができた。次にプレテストでは効率・公正の視点から考察し判断したが、ポストテストでは効率・公正の視点に持続可能性の視点が加わった生徒k・1の記述の変容を表19に示す。

表19 生徒k・1の記述の変容

生徒k		生徒1	
プレテスト	反対する。 せっかく増えた観光客が減り、生産額が減ってしまうし、小さい子どもから大人まで金額が500円でいいのか。	反対する。 1日に1,000人以上が集中するのに、400人に限定したら観光客も困るから。	
ポストテスト	反対する。 生産額がせっかく増えたのに、承認を受けた人だけの立ち入りにしたら生産額が減ってしまう。生産額が減少してサービス業に従事する町民の収入が減ってしまうと町を出る人もいるかもしれない。そうなると町自体がなくなってしまうから。	反対する。 500円が必要となると、観光客数が限定されて2008年から2018年にかけて観光関連産業を中心として増加した生産額がまた減少してしまうと町民の生活が苦しくなり、町民の生活も島の自然なども守れなくななると思うから。	

効率・公正の視点 ===== 持続可能性の視点 ~~~~~

生徒kは、プレテストでは効率・公正のうち主に効率の視点から考察し、現在の状況のみを捉えて判

断をしている。ポストテストでも効率・公正のうち主に効率の視点から考察しているが、そこに持続可能性の視点も加わることで、将来的な町民の生活の変化や町の存続の可能性にまで触れて述べており、将来的な効率の視点で考察して判断をしている。生徒1は、プレテストでは効率・公正のうち主に公正の視点から考察し、現在の状況のみを捉えて判断をしている。しかし、ポストテストでは主に効率の視点から考察し、さらに持続可能性の視点を加えて考察して判断している。これは将来にわたって町民の生活と島の自然の両方を守るためにには、公正の視点からだけでは不十分だと考え、効率の視点に持続可能性の視点を加え、将来的な効率の視点から考察して、観光関連産業を充実させることができると判断したと考える。生徒k、1ともにプレテストでは効率・公正の視点で考察して判断しているが、その判断は現時点のみを捉えた判断となっている。しかし、ポストテストでは10年、20年先を見通した将来的な効率と公正という視点で考察して判断するように変化している。

5 事前・事後のアンケートの分析

事前・事後アンケートの結果を図8に示す。

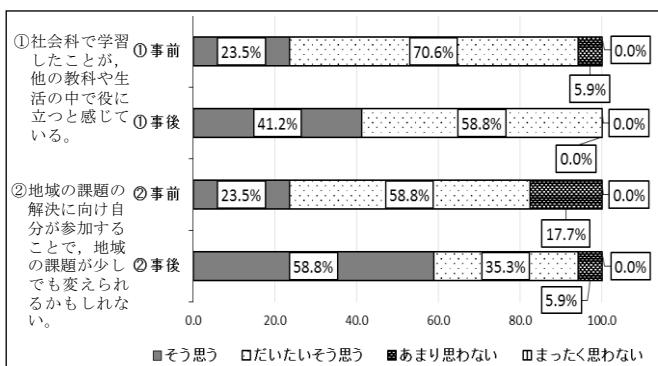


図8 事前・事後のアンケート結果

事前と事後を比較すると、図8中の①「社会科で学習したことが、他の教科や生活の中で役に立つ感じている。」について、「そう思う」と答えた生徒の割合が23.5%から41.2%に伸びており、肯定的な意見も100%となった。また、②の「地域の課題の解決に向け、自分が参加することで、地域の課題が少しでも変えられるかもしれない。」については、「そう思う」と答えた生徒の割合が23.5%から58.8%に伸び、肯定的な意見も82.3%から94.1%に

伸びた。事前アンケートでは「あまり思わない」と答えた生徒のうち、事後アンケートでは「そう思う」と答えた生徒mの思考の変容を表20に示す。

表20 生徒mの思考の変容

事前アンケート	
あまり思わない。 地域の課題についてはわかっているけど、そこから、自分に何ができるのかわからないから。	
事後アンケート	
そう思う。 自分と他の人の考え方は違う。他の人は違う自分の考えを伝えるだけでも、もしかしたら地域の力になれるかもしれないと思った。1人でも多くの人が参加すれば、少しは力になれると思うから。	

生徒mは、地域の課題は把握しつつも、解決に向けて自分に何ができるのか、具体的にどのように行動すればよいのかという点から迷いが生じ、否定的な回答になっている。しかし、事後アンケートでは、自分と他者の意見の違いを自覚し、他者とは異なる自分の考えが、もしかしたら地域の課題の解決の糸口になるかもしれないと考え、自分の考えを他者に伝えるだけでも地域の力になれると思い、地域の課題の解決に向けての意欲が向上している。さらに、異なる意見が多い方が地域の課題を解決する力になるとを考えていることから、多面的・多角的に考察することの重要性に気付いていると考えられる。このように、より多くの住民の参加を求め、様々な立場を踏まえて考察し、社会に見られる課題の解決を目指そうとする姿は、主体的に社会の形成に参画する態度につながると考える。

IX 年間の研究のまとめ

1 研究の成果

これまでの自分の授業では、対話の際に特定の生徒に発言が集中する、意見交流が行われても考察が焦点化されにくい等の課題があった。本研究で行った見方・考え方を働かせる学習活動では、生徒はこれまで気付いていなかった社会的事象がもつ様々な側面や立場に自ら気付き、課題の解決に向けて考察できるようになった。また、考察の過程でクロスセッションを取り入れたことで、同じ立場でも自分とは異なる考え方があることに気付き、より多くの考え方を踏まえた上で最終的な解決策を判断することができた。見方・考え方を働かせる学習活動は、「多面的・多角的に考察する力」「根拠を基に解決策を構想(選択・判断)する力」の育成に有効であった。

本研究で現代社会の見方・考え方を働かせて「多

面的・多角的に考察する力」と「根拠を基に解決策を構想(選択・判断)する力」が成長したと考えられることから、主体的に社会の形成に参画する態度も育成できたと考える。

2 研究の課題

現代社会の見方・考え方のうち、対立と合意、効率と公正、持続可能性を中心に取り扱ったが、今後はその他の見方・考え方を用いた単元開発に引き続き取り組む必要がある。また、現代社会の見方・考え方を十分に働かせることができない生徒もあり、現代社会の見方・考え方を働かせる学習場面を継続的に仕組み、社会に見られる課題の解決に向けて解決策を構想(選択・判断)する際の視点や方法として定着させる必要がある。

【注】

- (1) 唐木清志(2018) : 「社会参画に基づく授業改革を目指して」『社会科教育4月号』明治図書pp. 96-97に詳しい。
- (2) 唐木清志(2016) : 『「公民的資質」とは何か - 社会科の過去・現在・未来を探る -』東洋館出版p. 37に詳しい。

【引用文献】

- 1) 文部科学省(平成28年) : 『幼稚園、小学校、中学校、高等學校及び特別支援學校の學習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』 pp. 132-133
- 2) 文部科学省(平成28年) : 『教育課程部会社会・地理歴史・公民WGにおける審議の取りまとめ』 p. 5
- 3) 文部科学省(平成30年) : 『中學校學習指導要領(平成29年告示)解説社会編』東洋館出版p. 10
- 4) 佐伯眞人・大杉昭英・渋澤文隆(2000年) : 『新中學校教育課程講座<社会>』ぎょうせいpp. 166-167
- 5) 井田仁康・中尾敏朗・橋本康弘(2017年) : 『平成29年告示 新學習指導要領 授業が変わる! 新しい中學社会のポイント』日本文教出版p. 29
- 6) 文部科学省(平成30年) : 前掲書p. 26
- 7) 唐木清志(2016) : 前掲書p. 38
- 8) 文部科学省(平成28年) : 前掲書p. 30

【参考文献】

- 1) 国立教育政策研究所(平成19年) : 『特定の課題に関する調査(社会)』
- 2) 澤井陽介・加藤寿朗(2017) : 『見方・考え方 社会科編』東洋館出版
- 3) 唐木清志・西村公孝・藤原孝章(2010) : 『社会参画と社会科教育の創造』学芸社
- 4) 森分孝治(1978) : 『社会科授業構成の理論と方法』明治図書
- 5) 北俊夫(2012) : 『なぜ子どもに社会科を学ばせるのか』文溪堂
- 6) 小原友行(2009) : 『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン中学校編』明治図書
- 7) 大杉昭英(2017) : 『アクティブラーニング授業改革のマスターキー』明治図書
- 8) 文部科学省(平成11年) : 『高等学校學習指導要領解説公民編』実教出版
- 9) 原田智仁(2018) : 『中學校 新學習指導要領 社会科の授業づくり』明治図書
- 10) 福島県教育センター : 『授業に生かせる効果的な手法』
- 11) 原田智仁(2017) : 『中學校 新學習指導要領の展開 社会編』明治図書
- 12) 教育課程研究会(平成28年) : 『「アクティブラーニング」を考える』東洋館出版